

魯迅生誕110周年記念『魯迅と日本』魯迅生誕110周年仙台記念祭実行委員会編

目次

ご挨拶 魯迅生誕110周年仙台記念祭実行委員会 会長 西澤 潤一

親善 人類の前進を示す灯 北京魯迅博物館文物資料室 主任 李 允経

魯迅とその時代 東京大学文学部教授 丸山 昇

魯迅と仙台 仙台における魯迅の記録を調べる会 事務局員 渡辺 襄

医学から文学へ 東北大学教養部教授 阿部 兼也

図録 魯迅の生涯 福島大学経済学部助教授 手代木 有児

あとがき 魯迅生誕110周年仙台記念祭実行委員会 事務局長 阿部 兼也

ご挨拶 魯迅生誕110周年仙台記念祭実行委員会 会長 西澤 潤一

本年は、本学ゆかりの人である魯迅の、生誕110周年にあたる。

その記念として、北京魯迅博物館のご協力のもとに、本学・宮城県・仙台市・仙台商工会議所・河北新報社を主催者とし、同時に関係各方面の参加・協力による実行委員会を組織し、ここに魯迅生誕110周年仙台記念祭を挙行することになった。多くの市・県民をはじめ、国内的にはもとより、世界的に意義のあるこの文化行事に、諸外国の魯迅研究者各位が参加され、また注目しておられることは、誠に喜びにたえないものである。

魯迅は、日本が鎖国を解いて以来、西洋文化を導入しつつある時代に日本に滞在し、日本における異文化経験を自身の糧としながら、世界的な貢献を果たした偉人として、誠に注目すべきものがある。その本格的な異文化との接触は、本学医学部の前身である仙台医学専門学校留学時代にはじまる。

1904（明治37）年9月、仙台医学専門学校は、授業料免除で魯迅、本名周樹人の無試験入学を認めた。当時は日露戦争がたけなわの時であり、市内では出征する軍隊の歓送会や祝捷会も盛んに行われた。学生たちの中には、周樹人の成績が思いのほか立派なのを不思議に思ったかして、無礼をはたらく乱暴者もいた。解剖学の藤野巖九郎教授は、清国留学生周樹人のノートを一学年にわたり添削してやった。周樹人が医学を棄て文学へと転進することを決心して仙台医専を中退（1906・明治39年3月）するにあたり、藤野教授とは、特別のお別れをした。藤野教授は記念に自分の写真を、彼に与えた。周樹人は、中国人を目醒めさせる多くの作品を発表し、やがてその作品はいくつもの外国語に翻訳されるまでになり、世界文学に大きな貢献を果たした。また中国近代の父といわれる偉人となった。

それは、本学の歴史の輝かしいひとこまとして、末永く記念されるべきものと確信される。

今日わが国では、先端技術開発や、経済的活力の面における、世界的な求心力に見合った、文化的国際化の必要性が、日増しに強まっている。その決め手は、社会全体の中に、言い換えれば我々の生活感情の中に、いわゆる国際感覚の土壌が、どれだけ広がるかにかかっている。その方法をわが国にふさわしく探求するためには、明治以後のわが国の国際交流の事例を、その世界的貢献度を意識しながら、あらい直してみることも有益なのではないか。その意味で魯迅は、まさに今日あらためて、その存在が注目されて然るべき偉人であろう。この仙台が、文化の面でいかなる国際交流の歴史を積み重ねてきたか。のちに世界的な貢献へと結びついた事例をとりあげつつ、今後の可能な方法を探求するための出発点として、本記念祭が成功裡に挙行されることを祈って止まない。

親善 人類の前進を示す灯 北京魯迅博物館文物資料室 主任 李 允経

今年は、中国文化革命の偉大な旗手、魯迅先生の生誕110周年である。彼は一生涯を通じた奮戦により、現代の東方文明の「金字塔」をうちたてた。そこで、彼の不朽の功績を中国で盛大に記念するだけでなく、青年時代に留学した日本でも、盛大な記念祭が挙行されようとしている。彼の広範な、また清深な論著を研究し、千古に範を垂れる魂に、思いを馳せるものである。

この記念すべき時に、日本の友人たちが我々とともに、仙台での「魯迅と日本文物展」の開催を熱烈に願って居られることは、我々にとってこのうえない喜びである。

中日両国の文化交流の淵源は、はるか昔から続いている。隋・唐時代にまでさかのぼり得

るものはもとよりのこと、はるか昔、漢・魏の時期にまでさかのぼり得る。今に至るまで、すでに2,000年以上を経ている。

近代では、日本はかつて中国民主革命の海外における中心のひとつであった。孫中山、章太炎、秋瑾から周恩来にいたる多数の中華のすぐれた人物が、みなかつて日本で革命活動に従事し、日本国民と深い友情を結んだ。そしてこれら多数の中華のすぐれた人物のなかでも、魯迅の名前はつとに両国国民のだれもが知り、愛し尊敬されてきた。

言うまでもないことだが、魯迅はすでに中日両国の、国民の友好交流のこの上もなく堅牢な懸け橋であるのみならず、同時に変質などあり得ない良縁でもあり、世代を越えた風格ある記念碑となっている。

ご存じのとおり、魯迅の56年という短い一生において、日本に滞在した日々は7年の長きに達している。それは8分の1に相当する。そのあいだ、藤野先生が彼に与えた教育は、彼の生涯を通じて忘れがたいものであった。彼の藤野先生に対する深い思慕は、人の心の奥底を打つ。今回の展示には魯迅が仙台で学んでいるときの『医学筆記（医学ノート）』全6冊を持参した。それぞれのノートの中には、当時授業をしていた日本の教師達の、添削の筆跡がある。なかでも藤野先生の添削はもっとも多く、かつもっとも詳しい。古人が「人に善くするものは、人も亦これに善くする。」といている。藤野先生のすばらしい行為は、魯迅のすばらしい言葉を引き出さずにはおかなかった。彼は『藤野先生』の一文で深い思いをこめて書いている。「私が私の師であるとする人びとのなかで、彼はもっとも私を感激させ、激励を与えてくれた。時折、私は考える。彼の私に対する熱心な希望、倦まない教えは、小さくいえば中国のため、つまり中国に新しい医学を、大きくいえば、学術のため、つまり新しい医学を中国に伝えようと望んでいるのだ、と。彼の人格は、私の目と心には偉大に映る、たとえ多くの人の知るところではないにしても。」現在、もともと、けっして多くの人の知るところではなかった藤野先生は、すでに魯迅の名前と堅く結びついて、中日友好のきずなとなり、彼が80年前に魯迅のために自ら添削した『医学ノート』は、中日友好の歴史的証拠と永遠の象徴となっている。

とりわけ、獲難く貴いことは、中日両国の関係が日増しに緊張へとむかっていた時ですら、魯迅はかわることなく多くの日本の友人と親密な友情を保ち、共同して中日友好のゆるぎない殿堂を築くべく、レンガを積み、瓦を重ね続けていたということだ。あの時、両国国民の友好交流は一度阻まれた。しかし魯迅は逆にこう予言した。「私のみどころ、日本と中国の人々の間には必ずお互いに理解するときが来るはずだ。」（内山完造『生ける支那の姿』序）

1932年、日本の友人西村真琴が上海にやってきた。ちょうど“1.28”上海事変の時だった。彼は以前、戦火のなかから一羽の鳩を助け出し、連れ帰って日本の鳩と一緒に飼った。はじめは互いに仲良くしていたが、ついには西村先生はそこで墓を建てて葬り、あわせて“小鳩図”を描き、和歌一首を詠んで魯迅に送り、題詠した。その歌にはこうある。

一羽は東に、一羽は西に

二つの国には違いはあるが、

かわいい鳩たち

お互い仲良く寄り添って

同じひとつの巣のなかに。

魯迅はこの和歌と鳩図を受取ったのち、1933年6月21日に、七言律詩一首を作ってこたえた。

詩にはこうあった。「賢い鳩は夢から醒めてもまだ石を銜えている。闘士はゆるぎない誠実さをもち流れと逆らう。あらゆる大波を越えてもかわることのない兄弟がいる。再会してひとたび笑えば恩讐も消え去る。」（精禽夢覚仍銜石、斗士誠堅共抗流。度尽劫波兄弟在、相逢一笑泯恩仇。）

現在、魯迅が言った両国国民は相互に理解し、喜びのなかに談笑するという予言は、つとに生き生きとした現実になった。これはなんと喜ばしいことか！

魯迅と内山嘉吉の友好のよしみは、称えられ、とこしえに忘れられることはないであろう。ご存じのとおり、1931年の夏、彼ら二人は、共同して上海で“木刻講習会”を開き、中国の新興木刻運動の開始の旗印をたてた。この運動から今日までちょうど60年がたった。

今年は、魯迅が新興版画運動を唱導して60周年の記念でもある。中国の版画家たちは導師魯迅を偲ぶのと同じように、内山嘉吉先生のこの運動を推進する上に果たした歴史的貢献をも思い出すはずである。

このほか、魯迅と内山完造、塩谷温、増田渉、青木正児、鹿地亘、山本初枝、長尾景和、鎌田誠一、岡本繁などの日本の友人との頻繁な交流は、すべて深い友情の凝集であり、美しい情誼に満ち溢れている。みな歴史に記録され、また交流史上の佳話ともいべきものだ。今回展示される関係文物のなかに容易に見いだされるであろう。ここでは詳しくは言わない。

親善は、人類の精神のともしび、人類の進歩の方向を指し示す灯である。

中日両国人民の世代を越えた友好と、未長く変質しない良縁のためには、当然ながら、友好的で、しかも深い心の交流が礎石とならねばならない。先哲孔子はこういった。「独り学んで友なくんば、すなわち孤陋にて寡聞」（『礼記・学記』）。西洋哲学のベーコンも異なる言葉を用いて同じような意味を述べている。「真の友に恵まれないものは、もっとも純粹でもっとも哀れな孤独である。友情がなければこの世は一面の荒野でしかない。」（『ベーコン論説文集』）。要するに、本当の友情以外には、人々の心を通じさせることができる薬などは存在せず、知恵が人類に提供する一切の幸福のなかで、友情の獲得こそが鍵のように重要なのだ。

我々と日本の友人が共同で挙げる今回の文物展覧が成功することを、そして中日両国の人民と学者の友情が、日月のように天を渡り、江河のように地を流れ、永遠に続き、永遠に

衰えることのないようにと願っている。